

## どうやったら有害な男性性を手放せるのか、と問われたら

武田 砂鉄

4年ほど前に男性優位主義について記した書籍『マチズモを削り取れ』を刊行してから、男性の特権性について書いてほしい、話してほしいとの依頼がよく来るようになった。今回の依頼もそうだ。この人はわかってくれている、この人なら読者が納得してくれるものを書いてくれるに違いないと評価された上での依頼なのだろうか。なかなか危うい。書くにあたり、どんな原稿よりも慎重になろうと思う。

そうなんです、自分は男性が優位になっている社会を問題視していて、みなさんと同じ思いを持っているんですよ、と宣言するのは簡単なのだが、そうやって「味方ですよ！」とアピールするだけにならないように気をつけなければいけない。どうやったら有害な男性性を手放せるのか、と問われる。こうすれば手放せます、と語り出したらマズい。常にその有害さの発生を自分で監視し、あるいは指摘してくれる声をしっかり受け止めて、検証し続けるしかない。

私はもう大丈夫なんで、どうすればこうなれるかお伝えしますね、こんなことを言い出したら、それはもう、あちこちに残っている有害さを放置しているに等しい。男性性を手放すとは、女性の味方になることではない。手放せないものとして、どんなに捨てても体の中に残っているものとして、検証を怠らないようにする。人前で話したり、こうして書いたりする時にはどうしても刺激的な要素を入れてしまう。やっぱり、笑ってもらったり、一緒に怒ったりしたいから。ところが、その要素の中に、自分が男性であり、この社会で特権的な立場であるがゆえに放たれていたものはないか、後で検証する。

一言一句振り返って猛省し続けます、というわけではない。あの言動が相手にどんな印象・ダメージを与えた可能性があったかを考え続ける、とのニュアンス。これを繰り返す。つまり、こういった雑誌の巻頭言で、高らかに宣言するようではいけない。巻頭言としては物足りないけれど、「物足りる」とマズいと思う。



### PROFILE

ただださてつ：1982年、東京都生まれ。出版社勤務を経て、2014年よりライターに。2015年『紋切型社会』でBunkamura ドゥマゴ文学賞受賞。著書に『日本の気配』『わかりやすさの罪』『偉い人ほどすぐ逃げる』『マチズモを削り取れ』『べつに怒ってない』『今日拾った言葉たち』『父ではありませんが』『なんかいやな感じ』『テレビ磁石』などがある。TBS ラジオ『武田砂鉄のプレ金ナイト』ではパーソナリティを務めている。